

■ 書 評

大塚哲也 (著)

写真でみる片麻痺のリハビリテーション

天 児 民 和 (九州労災病院長)

大塚博士が今回「写真でみる片麻痺のリハビリテーション」を出版せられた。リハビリテーションに関しては既に多くの著書を出していられるがいずれも理論に偏しない実際的でご自身のご経験を中心にして書いていられるので理解し易いし、その上写真が豊富であることも大塚博士の著書の特徴ともいえる。今回は片麻痺という題ではあるが内容は老人の本質から説き起こし訓練中に起こし易い外傷等も詳しく記述しているのはいかにも大塚博士らしい真面目さが現われている。実際、片麻痺の訓練中に転倒して骨折を起こすことは

少なくない。一般に老人のリハビリテーションにはある程度のリスクがあることをよく認識していなければならない。最近片麻痺を起こすのは決して老人に限らない。私の病院にも40歳代の患者がいつも何人か入院している。それゆえにリハビリテーションは重要である。もちろん、高齢者にはADLの訓練で充分であり他にリクリエーションを加味すればよいが若年、中年者には真の社会復帰を目標にするべきである。フランス国民の信望の厚いパストールは43歳で左側の片麻痺になった。気の弱い者ならそれで社会活動が終るのであ

ろうが、彼はその後も多くの業績をあげている。その中でも狂犬病の治療はすばらしい業績であつたがそれが片麻痺の起こつてからのことであることは多くの片麻痺患者を勇気づけてくれると思うし、またリハビリテーションに従事する人々にも大きな希望を与えてくれると思う。私は日本のリハビリテーションはリハビリテーションという言葉のみが先行して実際面では低い水準に低迷していると慮るものであるが、大塚博士のこの名著の普及によつて一般的にも進歩を促進すると信じているとともにこのような名著を出版せられた大塚博士にお礼を申し上げたい。

(B 5 / 頁336 / 図140 / 写真1246 / ¥6,500 / 千300 / 医学書院刊)